

耳から、皮膚から空気を介し音の存在を認識させる

種子田郷 TEXT：池田敏弘（新宿店）

GO TANEDA

② 008年3月に待望の新作『vision in black』が発表されるにあたって、種子田の活動の中ではCDフォーマットでの作品発表がどの様な立ち位置にあたるのか、また、その広範に亘る活動の詳細までは記せないまでも、もっと知られて然るべき重要な彼独自のプラットフォーム、人脈にて具現化される様々な分野に及ぶ舞台作品など、それが種子田以外では成し得ない仕事である必然に満ちた軌跡を微力ながらご紹介出来ればと思う。そして、正に今、同時代に体験出来る機会を1人でも多くの方と与えることになれば嬉しい。

種子田は電子音楽の作曲家/パフォーマーであるが、彼と他との違いを決定付けているのは、音の持つ特性の内、空気感、存在感にフォーカスして、その音がどの様に立ち現れるかを、徹底的に拘っている点である。極端なことを言えば、実際鳴っている音と同等、もしくはそれ以上に音の存在感のデザインに注力している。独自の音響開発、技術に常に注目を集めるTaguchi 全面協力の元、その音が最も最良の状態で作成出来る様、スピーカーを作るところから音/空間をデザインしているのである。その様な種子田の創作はコンテンポラリーダンス、映像、美術、といった多分野にまたがる舞台作品で、どれも主で従でもない関係性を打ち出し、特に非常にジオグラフィカルな種子田の音は、今や日本のコンテンポラリーダンスの世界では森山開次、東野祥子、神村恵といった錚々たるダンサーと



のコラボレーションを重ね、無くてはならない存在となっており、種子田の音楽はダンサーに、批評家に、会場の観客に改めて音との関係性を問い掛けている。

ここまででお分かりの通り、種子田の創作は実際の上演をその場で体験するのが最も望ましい。なので、CDによる作品は種子田にとっては再生環境を操作出来ないという、ある意味特殊な制限の中での創作であり、上演とは全く別の聴体験として接するべきものである。

新作『vision in black』は'07年2月にイタリア2都市で発表した舞台作品を単独で音楽作品として昇華させたもの。作品に接し感じるのが、やはり純粋に音楽作品を創っているだけでは成し得ない時間感覚について。舞台というヴィジブルな前提があるはずのそのコンテクストを外した時、音だけで表現をする上でのそのマテリアルの圧倒的強度が聴覚をさらに研ぎ澄まさせてくれる。張り詰めた緊張を内包した金属質な音、フィールドレコーディングから、研磨し尽くした電子音まで、1つ1つが必然の上、自律して存在している。またそれらの音（または沈黙）が内包する時間感覚は単にリニアな時間ではない。双次元的ででも形容すればよいだろうか、音1つ1つが各々の規則で時を刻んでいるかの様な感覚。そういった時間秩序が無用な夢の中や、胎児の頃の感度にもしかすると近いのかもしれない。ライブ体験もぜひ。



NEW RELEASE

vision in black
go taneda
[project suara suara-004]
3月下旬発売予定
<NEW AGE>

LIVE INFORMATION

<美加理×種子田郷 Flowers >
2/26 (火) 27 (水) 19:00 開演
会場：青山円形劇場
<森のサカナ>
3/7 (金) 18:00 8 (土) 14:00/18:00
会場：BankART 1929 Yokohama 1F
ホール <http://suara.jp>